

歴史的建造物再生に使命

1.17 あの日からの出発

起業家の軌跡 ①

「バリューマネジメント」編 上

ベッドで身動きできなくなった。家族は無事。自宅も一部損壊で済んだ。まちの様子が気になり、地下鉄板宿駅付近まで車を走らせた。つぶれた建物のそばで住民が立ち尽くす。がれきの中、家族を泣き叫びながら捜す人や、火災で真っ赤に染まった空に言葉を失った。長崎に生まれ、祖父から原爆の話聞いて育った。「写真や映像で見た戦時中の長崎と同じ光景が目前にあった」

震災前、アルバイトで要職を担い、「何でもできる」と手応えを得て、大学卒業後は自ら事業を始めるつもりだった。だが、傷ついたまちは給水車の前に並び、ガスの復旧を手伝うことしかできなかった。「自分は何か

も役に立てていない」と無力さを痛感し、「30歳で起業する」と修正した。

20代は、経営者として必要な能力を身に付けることに注力した。新卒でリクルートに入社し、結婚情報誌の広告営業を3年半担当。その後、ベンチャー企業に転じて関西支社の立ち上げに関わり、在職中に米国の会計も独学で会得した。

経営者としての自信を深めた他分野は、起業に当たってどんな事業が求められるかを考えた。ちょうど、震災で経済が縮小した神戸で支店を閉鎖する大企業が相次いでいた。被災地は官主導で見た目はきれいになったが「お金をかけただけでは元の姿を取り戻せない」と感じ、「まちが失われる前に大切なものを残さない」と決心。不採算店を再生するとともに、遊休化した古い建物を式場などに活用するビジネスにたどり着いた。前職の経験も生かせると考え、2003年に29歳で個人創業し、05年にバリューマネジメントを芦屋市に設立した。

経営を運営会社から請け負って再生。だが、神戸・須磨離宮公園に近い大正期の邸宅「西尾家住宅」で苦い経験をする。06年に結婚式場として開業する予定だったが、運営会社が倒産し、工事が止まった。運営代行の立場では顧客や従業員に責任を果たせないことから「直接、運営しない」と誓った。

07年、建築家安藤忠雄が設計した「ザ・ヒルサイド神戸」(神戸市灘区)の営業権を取得したのを皮切りに、直営化を拡大。別の運営会社が開業させた西尾家住宅でも運営代行を続けながら、12年に「神戸迎賓館 旧西尾邸」として悲願の直営化を果たした。

その後、古民家再生会社のN O T E (丹波篠山市)と組み、竹田城跡や篠山城跡の周辺にある酒蔵、旧家を活用してホテルを開くなど地方に事業を拡大。設立15年で年商約100億円の企業に育った。気鋭の経営者と注目されるが、脳裏から震災の記憶が消えることはなかった。11年に発生した東日本大震災では、被災地支援に手腕を発揮することになる。

敬称略 (大島光貴)



バリューマネジメントが結婚式場やレストランとして運営する兵庫県指定重要有形文化財「神戸迎賓館 旧西尾邸」=神戸市須磨区離宮西町2 (同社提供)



阪神・淡路大震災をきっかけに歴史的建造物の利活用事業に取り組む他力野淳社長=大阪市北区大深町

「歴史的資源が失われようとしている。なくなってしまうたら、もう戻ってこない。そんな資源を活用した観光まちづくりを完成させ、地域の課題解決にまで入り込む存在にしていこう」歴史的建造物を活用し、ホテルや結婚式場などを運営するバリューマネジメント(大阪市)社長の他力野淳(46) 芦屋市は7日、大阪・中之島の大阪国際会議場で全社員約500人を前に力説した。5年後には現在の3倍に当たる売上高300億円を目指すという。事業の原点となった阪神・淡路大震災から四半世紀、会社設立15年の節目が重なる年が幕を開けた。

「1・17」当時、大阪商業大学の学生だった他力野は神戸市営地下鉄名谷駅近くの集合住宅に家族と暮らしていた。午前5時46分。激しい縦揺れで目覚め、

「1・17」は多くの人の運命を変えた。被災が起業につながったケースもある。そんな経営者の軌跡を追う。まずは、バリューマネジメントの創業社長にスポットを当てる。